2　京都の外療道具師　真龍軒安則

岩原　良晴
株式会社大塚製薬工場 信頼性保証本部 輸液DIセンター

江戸時代後期，華岡青洲の外科道具を製作した一人とされる真龍軒安則は，京都において外療道具師と称した佐々木家に代々使われてきた名である．この佐々木家の家系に関しては，次に示す北川順が行った1927（昭和2）年4月の調査報告が唯一の情報であると言えよう．

佐々木家は四代の祖治兵衛氏（安政三年四十六歳にて死亡）は医用鋏の製造を創めし人なり（佐々木家は代々安則を称し，初代，二代は眞龍軒と號し，宝蔵院流の槍術の指南をなし三代は刀剣鍛冶なりしという）．

	打物屋				
（佐々木家）	治兵衛 ——	治助 ———	治兵衛 ———	治兵衛 ———	次郎助
	文政元年	文政十二年	明治十一年	明治三十六年	明治三十六年
	四十六歳歿	六十三歳歿	七十六歳歿	七十九歳歿	五十五歳歿
				———	東京の佐々木安則

この系統図に基づいて各々の人物と生存していた時期を図に表すと，いくつか辻褄の合わない部分があり，はじめにその修正案を記載する．まずは4代治兵衛の歿年で，本文では安政三年とあるが，文政元年とするのが妥当である．次は4代治兵衛の歿年齢で，5代治助は治兵衛の弟（年下）の可能性が高いことから，歿年齢は64歳であったと考えられる．よって4代治兵衛の歿年歿年齢は文政元年64歳として話を進めたい．

【3代安則】1745（延享2）年の京羽二重大全 巻3 諸職名匠の部 刀剣鍛冶所の項に外科道具を扱う者として安重，安光，安則という3名の職人がおり，その中の安則の住所は富小路夷川下ル町とある．同書，諸師諸芸の部 医師の項には外科を標榜する5名の医師がおり，その中の富小路通夷川上ル町に大和見水とある．これらから，富小路夷川下ル町に住む刀剣鍛冶職人が3代安則であり，大和見水の外科道具を扱っていたと考えられる．

【4代治兵衛】1934（昭和9）年の清水共造の報告には，4代治兵衛は長崎で外療道具製作の技術を伝習したと記されている．冒頭の修正により治兵衛は1755（宝暦5）年の生まれとなり，安永の頃に長崎にて修行を行い，華岡青洲が遊学していた時期には京都に戻って外療道具製作を行っていたと考えられる．しかしながら5代治助と共に，4代治兵衛の痕跡はほとんど残されていない．

【6代治兵衛】1831（天保2）年の商人買物獨案内に真龍軒安則と称する外療道具師が2軒あり，その一つは三条麩屋町西へ入町にある．1851（嘉永4）年の商人買物獨案内ではIAの極印を掲げ，1864（文久4）年の都商職街風聞では寺町蛸薬師上に花岡流外療道具 真龍軒が記されている．これらはいずれも同一人物であり，1978（昭和53）年に末中哲夫の報告にて「外科道具一式・IAマーク入りを発注した寺町六角南へ入ル真龍軒安則治兵衛3代目」，ここで言う6代治兵衛と考えられる．

【7代治兵衛】1877（明治10）年の第一回内国勧業博覧会に，京都の佐々木治兵衛がサックインストルメントを出品して花紋賞牌を受賞している．1881（明治14）年の第二回博覧会にも多くの外療器を出品し，その中に皮下注入器が記載されている．これらの製作者は7代治兵衛と考えられる．

【9代安則（里宇）】8代治兵衛の跡は里宇（りう）が継ぎ，医療器械に加えて歯科材料も扱ったようである．1914（大正3）年の日本全国商工人名録ではYAの印を掲げているが，1925（昭和元）年の京都商工人名録（大正15年改版）を最後に，その後 佐々木家の名は見られなくなった．